# ローマ人への手紙第一三回質問

1 それでは、肉による私たちの父祖アブラハムの場合は、どうでしょうか。

2 もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。

3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた」とあります。

4 働く者の場合に、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。

5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。

6 ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。

7 「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。

8 主が罪を認めない人は幸いである。」

（ロマ四章一―八節／新改訳2017）

（問一）一―八節でパウロは旧約聖書のどんな例を用いて、義認（神が人をご自分の前での正しい立場を与えること）が行いでなく信仰によることを証明していますか。

（問二）アブラハムはどのようにして、義と認められ、正しい者とされましたか。

グループ聖書研究（聖書を読む会手引）より

# 唯一の救い

（ロマ四章一―三節）

わたしたちは、何か善いことをして救われると考えますが、聖書は一貫してそのような考え方を否定します。それは、善いことをすることを禁じているのではありません。罪の中に堕落してしまった人間が、いくら善いことを行なっても、それによって救われることは絶対にできないからです。聖書は、そのことについて「すべての人は、罪を犯したので、神の栄光を失ってしまっており…」[1]と教えております。それにもかかわらず、人間は何かをして、それによって救われようという考えを捨てようとはしません。ですから、聖書は繰り返し、そのような間違った考え方を打ちこわすために、神の恵みのみによる救いについて教えているのです。

人間は堕落すると、きまって自分の善行による救いという教えに向かって行きます。旧約聖書の教えから堕落したユダヤ教もそうでしたし、キリスト教も、中世のローマ・カトリック教会がそうでしたし、宗教改革以後も、プロテスタント教会の中に、それをはっきり見ることができます。その点から見て、きょう学ぼうとしている個所は、極めて重要なことを教えていると言っていいでしょう。

というのは、かなりの人々が、旧約時代の救いと新約時代の救いは違っていると考えていますし、旧約聖書の教えと新約聖書の教えとは、同じでないと考えているからです。しかし、前回のときにも見ましたように、イエス・キリストの十字架の贖いによる救いは、旧新約聖書を一貫したものですし、救いは決して二通りあるのではありません。イエス・キリス

トの贖いによる唯一の救いがあるだけです。そのことを、パウロは、前回の個所では「律法を確立する」という言い方で表現しましたが、今回の個所では、アブラハムを例証として、それを説明するわけです。

信仰義認の教えは、旧約聖書の教えと矛盾するどころか、一致すると述べたパウロは、予想しうる反対論を次に取り上げたわけです。堕落したユダヤ教では、人間の善行による救いを教えていましたし、彼らは必ずアブラハムを例証として持ち出して来るに相違ないからです。当時のユダヤ教の考え方を表わしている旧約外典には、アブラハムはその行ないによって義と認められたとしるされています。[2] パウロはここに当時のユダヤ教のアブラハム解釈とは全く違った信仰義認論を持ち出してきました。しかも、彼はそれを創世記一五章六節を拠り所として、論証しています。「というのは、聖書は何と言っているのか。『アブラハムは神を信じた。それで、彼は義と認められた』。」パウロも、かってはガマリエル門下のユダヤ教徒として、アブラハムの行ないによる義認を徹底的に学んだはずです。それなのに、彼はいったい、いつ、どのようにして信仰義認という解釈に変わったのでしょうか。そして、もう一つここに問題提起をすることができるとすれば、この二つの解釈のどちらが正しいかということを決定しうるものは、はたしてあるのでしょうか。

パウロは、パリサイ派の学徒として、ガマリエル門下の優等生として、そこでの学びを終え、その信仰から、教会やクリスチャン迫害に向かったのです。しかし、彼がそうしてい

るとき、ダマスコ途上でキリストに出会ったあの時、彼は主から直接、新しい啓示を受けました。そのことについては、彼がガラテヤの諸教会への手紙の中にしるしていますから、それを引用してみましょう。

「というのは、兄弟たち、わたしはあなたがたに知ってもらいたいのだが、わたしが宣べ伝えた福音は、人によるものではない。わたしはそれを人から受けたのでもなければ、人から教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示を通してなのである。というのは、ユダヤ教にいたころのわたしの前歴については、あなたがたはよく聞いているからだ。すなわち、わたしは度はずれに神の教会を迫害し、それを撲滅しようとしていた。そして同国人の中で、わたしと同年輩の多くの者たちよりもはるかにユダヤ教に身を入れ、先祖たちの言い伝えに対し、きわめて熱心であった。ところが、母の胎内にあるときから、わたしを選び分かち、御恵みによってわたしを召された方が、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしのうちに啓示するのをよしとされた時、わたしはすぐに血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにものぼらず、アラビヤへ出て行った。[3]」

このように、パウロは主から直接の啓示によって、旧約聖書についての正しい解釈を教えられたのです。

ですから、主イエス・キリストご自身、決して善行による義認の教えを持ってはおられませんでしたし、かえって信仰義認を教えておられます。それは、あのパリサイ派の人と取

税人のふたりが祈るために宮に行ったという譬話の中に、よく示されております。パリサイ派の人は、こう祈っています。「神様。どうぞまちがわないでください。私は、ほかの人々のように、ゆすり取ったり、不正をしたり、姦淫をしたりしませんし、ことに、あそこで祈っている取税人のような者ではございません。そのことを感謝いたします。また、私は、一週のうち二度も断食をしておりますし、全収入の十分の一を献金しております。そういう者なのでございます。[4]」しかし、主は、義と認められて家に帰って行ったのは、このパリサイ派の人ではなく、自分の罪を認め、神のあわれみにすがった取税人だと教えておられます。[5]

また、主は、次のようにも語っておられます。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。[6]」これは、アブラハムが行ないによって義と認められたのではなく、キリストの時代の人々と同じように、信仰によって義と認められたことを語っておられるものです。

ユダヤ人にとって、アブラハムは偉大な先祖でした。彼らはアブラハムの子孫であることを誇りとし、何かと言うと、アブラハムを誇っておりました。しかし、そのアブラハムの救いについて、彼らは間違っていたのです。主からそのことを示されたパウロは、御霊の光に照らされて、もう一度、旧約聖書を読み直しました。するとそこに明らかな信仰義認の記述を見いだしたのです。それが、ここに引用した創世記一五章六節のみことばです。ユダヤ教によって曲解されたア

ブラハム解釈ではなく、聖書それ自身が語るアブラハムの姿です。「アブラハムは神を信じた。それで、彼は義と認められた。」これほどはっきりと信仰義認について教えているみことばが、旧約聖書にあるのです。

これではっきりしました。救いは、旧約も新約も一つであって、信仰によって義と認められるのです。それでは、旧約時代の人々は、どのようにして救われたのかと言いますと、さきほど引用した聖句のとおり、アブラハムは、キリストを待望して救われたのです。旧約時代の人々も、キリストの贖いによって救われ、新約時代の人々も、キリストの贖いによって救われるのですが、旧約時代の人々は、キリストを待望する信仰によって救われたのです。それに対して、新約時代のわたしたちは、すでに成就されたキリストの贖いを信じて救われます。信仰によって救われるという点では全く同じです。

この信仰義認の教えは、人間に誇りを与えないものです。ここでもこう言われているとおりです。「もしもアブラハムが行ないによって義とされたのなら、彼は誇ることができよう。しかし、神の前では、できない。」つまり、信仰義認というのは、信仰の力で救われるというのではありません。信仰すらも神から賜物として与えられるものですし、信仰に何か力があると考えるべきではありません。信仰を通して、神が恵みとして救ってくださるのです。もしわたしたちが自分の信仰の力で救われるのだと考えたとしたら、それは、信仰という着物を着た自分の行ないということになってしまうで

しょう。聖書は一貫して、人間の聖さとか、人間の信仰とか、人間の善い行ないが人を救うのではないと教えています。そのようなものによっては、わたしたちは自分を罪から救い出すことはできないのです。罪からの救いは、あくまでも、罪人の手によってはできないもの、ただ神の恵みによって救われる以外にはないのです。ですから、わたしたちは、何の功績もないわたしたちを救ってくださる神の恵みを覚え、心から神をほめたたえずにはいられません。

**注**(1)ローマ教会への手紙三章二三節。
(2)マカベヤの第一の書二章五二節、ヨベル書二三章一〇節など。
(3)ガラテヤの諸教会への手紙一章一一―一七節。
(4)ルカによる福音書一八章一一―一二節　現代訳。
(5)同書一八章一四節。
(6)ヨハネによる福音書八章五六節　新改訳。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より